

所長挨拶

## メディアセンター雑感

きうち ふみゆき  
木内 文之

(薬学メディアセンター所長)



私が学生の頃、薬学部の図書室は専門書を借りる場所、学術雑誌を読み必要に応じてコピーする場所であった。新着の学術雑誌をチェックし、冊子体のケミカルアブストラクトで文献検索をする。インターネットなどなかった時代の話である。いつしか時は遷り、文献検索も学術雑誌の最新号のチェックも机の上のコンピューターからできるようになった。それに伴い、図書室に足を運ぶ機会もめっきり減った。インターネットの発達と図書の電子化は、教育・研究のあり様を一変させている。科学は過去からの研究成果の積み重ねの上に立脚して発展していくものであり、研究の最先端は常に競争の世界である。インターネットの発達と図書の電子化は、研究情報のリアルタイム化をもたらし、世界中の研究者がほぼタイムラグなしで最新の研究情報を共有できるようになった。そしてこれが研究の進展を大きく加速していると同時に競争を激化させている。また、大手出版社などが図書の電子化を進めたことと情報検索ツールが整備されたことによって、科学研究の基礎となる過去の研究データへのアクセスが容易になり、過去の多くの学術論文にクリックひとつでアクセスできる環境が整ってきている。

しかし、研究者にとって良いことばかりではない。研究情報の世界的なリアルタイム化が進化した現在では、自分の研究に関連する学術雑誌にリアルタイムでアクセスできるか否かが、研究の質とスピードに大きく影響する。しかし、出版社が提供する電子データは当然有料であり、そのコストは年々膨らみ続けているのに対し、メディアセンターの予算は限られている。薬学部でも冊子体の雑誌や継続図書の購入をやめて、その予算を電子ジャーナルの購入費用に回している。しかし、このままではやがて購入タイトルを減らさなければならなくなるのは目に見えている。電子ジャーナルは、購入をやめると過去のデータへのアクセスもできなくなる。冊子体の購

入を中止してしまっているタイトルでは、過去の論文のコピーの入手も儘ならなくなる心配もある。研究情報へのアクセス環境をいかに確保していくかが、大学全体としての研究力を維持しさらに向上させるのに重要な課題となっている。しかし、大手出版社との価格交渉などは、1大学では手に負えない状況になっているように思う。

さて、教育の面から見たメディアセンターはどうか。薬学部芝共立キャンパスはビルが3つのみの狭小なキャンパスのため、メディアセンターは学部学生が落ち着いて勉強できる貴重な空間を提供している。集中して勉強する場としての図書室の役割は、今も昔も変わらない。大きく変わったのは、学生が情報を入手する手段だろう。今の学生は、レポートや卒論に当たり前のようにインターネットのホームページを引用する。インターネットは簡単に検索でき、欲しい情報が手軽に入手できる。しかし、インターネット上の情報には質の高いものもあるが、断片的なもの、誤解を招くもの、全く誤ったものなど、その質は玉石混交である。こうした情報の質を正しく見極めて利用するには、それなりの基礎知識が必要である。そしてその源となる情報を提供するものが、メディアセンターの大切な役割であろう。インターネットの時代であるからこそ、質の高い体系的な知識を学べる図書を整備し、学生に気軽に利用してもらえるようにすることが重要になっていると思う。もともと薬学は、物理化学、生物学から倫理学、心理学さらには市場経済に及ぶ非常に幅広い分野をカバーする総合科学である。専門性の高い本も必要であるが、分野横断的な教養を身につけられる図書も必要であろう。今は、タブレットやスマホで読書する時代かも知れないが、メディアセンターは本を手にとってページをめくる感覚を楽しめる空間でありたい。